

“生きる”を支える

365^日

の生活をつなぐ仕事



ふくし

よりよく生きる

福祉の仕事 = well being を支える



「福祉の仕事」と聞いて、 誤解や不安、疑問を抱えて立ち止まっていますか？

立派な仕事だと思うけど…
「大変だよ」と聞くとちょっとね…



well being とは??

命をつなぐためには、「入浴・食事・排泄」のケアも大切です。しかし、生きているだけでは幸せとは言えません。つないだ命を輝かせる必要があります。well being (よりよく生きる)とは、ただ体が健康というだけでなく、精神的そして社会的に調和がとれた良好な状態を意味します。つまり、「病気でない状態＝健康」だけでなく、「心の在り方」や「他者との関わり」も含めて「健康」であることです。そして、この「よりよく生きる」を支えるのが福祉の仕事の中心にあります。



流しそうめん
日本の夏
いい天気



柏餅風
蒸しパン
手作りお菓子

福祉の仕事の労働環境は大きく変化しています

「福祉の仕事」は「入浴、食事、排泄のお世話」を24時間ひたすら繰り返しているというイメージを未だに拭い去ることができずにいます。「福祉の仕事に就きたい」と親に言うのと「大変だよ」という答えが返ってきます。対照的に「看護師になりたい」と言うのと「すごいね～」という答えによって代わります。仕事の中身はかぶるところもとても多いのです。この「大変」の評価軸はとても不明確です。具体的に福祉の仕事は、どんな仕事と、どう比較して大変なのでしょう。

今、福祉の仕事の労働環境は大きく変化しています。介護ロボットや便利な福祉用具が導入され、人を持ち上げなければならないような介護が減少しました。また、ICT(情報通信技術)の導入により、利用者の見守りや情報の交換がモバイルやパソコンでできるようになり、業務の効率化が進んでいます。





TSUDOIBA

元町家

福祉の仕事の魅力

thank you

“お互い様”で生きる

「ありがとう」のモッチボール

福祉の目的は、よく「自立（支援）」と言われるが、「自立」を自分の身に置き換えてみるとどうでしょう。過去から現在において、生きていく上でのすべての決定と実行を一人でこなしているでしょうか。赤ん坊の時はすべてを親に依存しています。成人すると自立度は向上しますが、それでも周囲の人々や社会サービスに依存しながら生きています。病気や高齢になると、再び依存度が増していきます。つまり、この世に「完全自立」は存在しないのです。

お互いに支えあうことを「互恵の関係」と言います。平たく言えば“お互い様”です。お互い様で生きていくのが人の自立のあり様なのです。福祉が目的とする「自立（支援）」とは“お互い様”で生きることを支えることなのです。

“お互い様”で生きること”を目的に仕事をしていると、一つの空間に多くの利用者とスタッフがごちゃ混ぜになって生活することになります。そして、いろいろな活動をして、その目的が達成されると、お互いを労うことになります。「あんた上手やな」「助かったわ」「楽しかったね」。そして最後に交わす言葉は「ありがとう」です。利用者やスタッフの間で「ありがとう」が飛び交います。「ありがとう」の言葉をもらうと、「喜んでもらえてよかった」「役に立つことができた」と思えます。それは「もう少し生きていてもいいかな」という自己承認にもつながります。スタッフも同じです。福祉の仕事ほど「ありがとう」と言ってもらえる仕事はありません。この「ありがとう」が仕事のやり甲斐にもつながります。



みんな de びと

365日の生活をつなぐ仕事

チームワークの一体感

共に楽しみ、共に喜び、共に生きる

福祉の仕事は、365日の生活をつなぐ仕事です。そういうと、「やっぱり大変な仕事だ」と思われるかもしれませんが、1年を通してずっと仕事をしているわけではありません。このような仕事は他にもたくさんあります。福祉現場は医療、福祉の専門職や、家族、地域住民等がチームを編成して、それぞれの専門性や柔軟性を活かしながら役割を分担して利用者を支えます。利用者もチームメンバーの1人として加わり、目標達成に向けて動くことで、チームとしての一体感が醸成されます。そしてチームとして動くことが、仕事の充実感や達成感につながり、仕事をする意味を見出しing こととなります。

「自己実現」という言葉があります。ヒトの“欲求”の最も高みにあるものと言われるたりします。私たちはいろいろなアイデンティティを持ち合わせています。たとえば、家族の一員として、友人として、地域住民として、趣味仲間としてといったように立場によってアイデンティティを使い分けして生きています。“仕事人としての私”も同じです。福祉の仕事は、空間と時間を共有しながら一緒に過ごすことがベースです。そこに「支援」という場面上が乗せされます。その支援を通して、楽しんだり、喜んだりする感情を共有する。それが私たちの仕事人としてのアイデンティティとなり、“共に生きる”=「仕事人としての自己実現」につながっていきます。



役割づくり

誰かのために、誰かと一緒に

高齢、認知症になると、だんだん意欲が無くなっていくのは当たり前のことです。リハビリテーションをしましょうといっても、その意味がわからない、記憶に残らないから続かないといったことも起こります。しかし、「花見に出かけませんか?」「白菜を切っていただけますか?」と声をかけると喜んでいただけます。リハビリと何が違うのか。それは「誰かと一緒に」「誰かのために」行うからです。これが「役割」です。人が動く動機づけはここにあります。その人が無理なく、楽しみながら続けることができる役割を見つけ出します。



認知症々了

実際の

認知症になると不幸なの?

「認知症にならんようにせなあかんあ」よく聞く言葉です。自分のこともわからなくなって、周囲に迷惑をかける…そんなイメージでしょうか。しかし、「認知症は神様が与えてくれた安寧の場」という人もいます。認知症の人が不幸になる大きな要因は周囲の不適切なかかわりと言われます。「何度言ったらわかるの」「またこんなことして」という言葉の意味と感情は認知症の人にもすぐわかります。認知症の人とともに暮らす。これがケアの目指すひとつのテーマです。



お仕事

支える

自己決定と安心・安楽

福祉は、可能な限り自己決定(主体性)を尊重するのが1つのテーマです。しかし自由に動いていただくと、当然ながらリスクは増えます。そこも含めての自己決定です。しかし、事故に遭遇しても自己責任で片付けるわけにはいきません。リスクから守るのも福祉の仕事。自己決定とのバランスをとりながら安心・安全でいられるように支援します



看取り

死は生の通過点

超高齢社会を迎え、福祉現場では看取りケアが当たり前になってきました。死は忌み嫌うものではなく、生の延長線上にあるひとつの区切りとも考えられるようになりました。QOD (Quality of death) という言葉があります。死のありかたや死にゆく過程の質を表しています。住みなれた場所で逝きたい、逝かせたいという要望がほとんどで、相当な苦痛が無い限りは医療機関での看取りを希望することはなくなりました。「より良い状態での旅立ち」とはどうあればいいのかを考え支えるのも私たちの仕事です。

一緒に
色々
やろう。



& 家族

利用者と家族をつなぐ

福祉のサービスを使い始めると、家族との距離が希薄になります。利用者と家族の縁を断ち切らないのも私たちの仕事です。そのためには、いつでも、どこでも、どんな理由でも会える機会を持ってもらえる配慮が必要です。遠方から来た家族と一緒に泊まれる、時間の制約なしに面会ができる、家に帰ったり、一緒に食事やお葬式に外出できる。そんな支援が求められます。家族は両親や配偶者を福祉サービスに託すことにやるせなさを感じていたりします。このような家族に、「この施設に託してよかった」と思ってもらえるようにしなければなりません。大変な部分はこちらが受け、おしゃべりや楽しみ事は家族にさせていただく。「いいとこ取り」を支えるのも私たちの仕事です。



地域と
こころ
つなぐ。



& 地域

地域とのかかわり

認知症の独居高齢者を、一生懸命地域が支えてどうにか生活が成り立っています。それでも支えきれなくなり、介護保険サービスが入ると、それまで支えていた地域の人々が、潮が引くようにいなくなってしまう。施設にでも入ろうものなら、何十年も生きてきた地域から完全に引き剥がされ、裸一貫で一からお付き合い。そんな利用者と地域を繋ぎ止めるのも私たちの仕事です。地域の行事に出向いたり、反対に呼び込んだりしながら、福祉サービスのお世話になることは、決して特別な場に身を移すことではないことを知っていただく取り組みもしています。



新人のあゆみ

思いを否定せずに受け入れ、
少しでもその人らしさを引き出したい

祖父母が入居していた介護施設で介護職の仕事を見ていたことや中学生の時に介護ボランティア活動を行ったことがきっかけで、高校進学時より介護職の道を選びました。両親からは「介護職は大変だよ」と言われましたが、実習も経験して得た「この仕事に就こう」という決心を両親に伝えました。就職した後に、仕事の話が聞かれた両親は「これからもこの道で頑張るといいな」と応援してくれるようになりました。

私が「はちぶせの里」を選んだのは、入居者の思いを尊重して仕事をするを大切にしているところです。私が考える尊重とは、入居者の思いを否定せずに受け入れることだと捉えています。もちろん、ご本人の意向に沿えないこともあるので、その時にはできない理由を丁寧に説明します。また、認知症の方は忘れることが多いので、理解されるまで何度も繰り返し説明しています。関わる時間が少なくなっても入居者の声にならない思いを聴き、少しでもその人らしさを引き出せるように意識しています。それが、その人らしく暮らせることに繋がります。イキイキとした表情に繋がっているのではないかと、個人の尊厳を守ることになっていくということを実感しています。



「あなたに出会えてよかった」と言われる介護福祉士になりたい



中川 茉胡 mako nakagawa

職種：介護福祉士

趣味：友達とお出かけ、買い物

将来の夢：

入居者の方、職員からも信頼され、寄り添える素敵な介護福祉士になりたいと思っています。入居者の方一人一人がその人らしく笑顔で毎日が過ごせるよう、少しでもサポートしていきたくと思っています。

Point

対人援助職が大切にしなければならない専門的価値

01 尊厳の保持

すべての人に備った存在価値を互いに尊重しあうこと。

02 生命の保持

最も大切な価値が、「生命の保護」です。命が守れないと専門職とは言えません。

03 公正・中立を保つ

本人と家族の間やチームメンバー等において常に公正・中立であること。

04 自己決定（主体性）の尊重

たとえ認知症になっても、「これが食べたい」、「この服が着たい」といったような小さな自己決定から、「最後はどう逝きたいか」という、人生最後の最大の自己決定までも保証すること。

05 本人利益の優先

支援者側の利益に立った支援ではなく、利用者の最大福祉・利益に立った支援をすること。

06 QOLの向上

役割を持って生き生きと楽しむことができること。

07 守秘義務

個人情報を取扱う時に、本人の利益のためになぜその情報が必要かを明確化できること。

08 積極的情報開示

支援者がどのように利用者とかかわっているか、関係性に見えるように、積極的に情報発信すること。

対人援助職と言われる私たちは、多様な“価値（倫理）”を基に支援をすることを求められています。究極的価値と言われるものがあります。それは「尊厳」です。そして、尊厳を守るための道具的価値と言われるものがあります。それが「生命の保護」「公正・中立」「自己決定（主体性）の尊重」「本人利益の優先」「QOL（生活の質）の向上」「守秘義務」「積極的情報開示」などと言われるものです。

普通ならば、素人を圧倒する「知識」と、その知識を活かして実践できる「技術」があればプロフェッショナルと言えます。しかし、福祉のプロフェッショナルはもう一つ大切な要素が求められます。それがお示しした「価値」です。「価値」「知識」「技術」は対人援助に求められる構成要素と言われます。このような「価値」は支援経過の中において時にぶつかり合うことがあります。「倫理的ジレンマ」です。たとえば、利用者は「もう十分長生きしたから好きなように飲み食いしたい」と言います。しかし家族は「糖尿病が悪くならないようにしてほしい」と言います。「自己決定」と「生命の保護」がぶつかりあっています。福祉の仕事では、このような倫理的ジレンマが日常的に見られます。福祉の仕事の醍醐味は、このような倫理的ジレンマを、「価値」をベースにして「知識」と「技術」をもって解決していくことなのです。

好きな場所で就職
はちぶせで暮らそう、働こう。

地方 自然豊かな環境



Uターン就職

生まれ育った出身地
に戻って就職



Iターン就職

出身地以外の場所に就職



都会

Uターン・Iターン就職は、仕事と一緒に“ライフスタイル”も選ぶことができます。生活の基盤を都会から地方へ移すことは、日々の暮らし方、家族のあり方、お金の使い方など、理想とするライフスタイルを主軸におき働き方を考えることができます。

読んでくださった皆さまへ
私たちのメッセージ

すべてを通して「楽しい」と思える仕事はそうないと思います。

でも、「おもしろい仕事」はあります。

「おもしろい」の中には「大変さ」も含まれます。

裏を返せば大変さを越えなければ

仕事はおもしろくならないのだと思います。

福祉の仕事、めっちゃくちゃおもしろいです。

この冊子を通して、福祉の仕事を知っていただく

ひとつのきっかけになれば幸いです。



はちぶせの里

hachibuse village

社会福祉法人 関寿会

〒667-1104 兵庫県養父市尾崎 1327 番地

<https://hachibusenosato.com/>

🔍 はちぶせの里

詳しくはWEBページをご覧ください

